

「製薬協創立50周年記念講演会」を開催

今年で50周年を迎えることとなりました日本製薬工業協会（製薬協）は、1968年5月23日、会員数61社により設立総会が開催され、創立されました。創立50周年を記念し、「製薬協創立50周年記念講演会」が、2018年5月24日、経団連会館カンファレンス（東京都千代田区）において、国会議員、行政官、関係団体の代表者、オピニオンリーダー、報道関係者および会員会社等から約340名の出席のもと開催されました。



会場風景

講演会冒頭、当日まで製薬協会長を務め、本講演会開催に尽力したアステラス製薬会長の畑中好彦氏より、「製薬協は50年前の5月23日に設立されたので、本日で50年と1日である」との挨拶とともに、演者の生物学者で青山学院大学総合文化政策学部教授の福岡伸一氏が紹介されました。



製薬協 畑中 好彦 前会長

第一部 講演会

福岡伸一氏による「生命を捉えなおす—動的平衡の視点から—」と題する講演概要は以下の通りです。

現在、私たちの周りには生命操作をめぐるさまざまな議論があり、それらは遺伝子組み換え、クローン技術、iPS細胞、臓器移植等、多岐にわたります。これらを可能とする先端技術の通奏低音には、「生命とはミクロな部品が集まってできたプラモデルである」という見方、すなわち機械論的生命観があります。

ルドルフ・シェーンハイマーは、生命が「動的な平衡状態」にあることを最初に示した科学者でした。私たちが食べたものの分子は、身体を構成する分子と絶え間なく交換されつづけています。つまり生命とはプラモデルのような静的なパーツから成り立っている分子機械ではなく、パーツ自体のダイナミックな流れの中に成り立っている効果そのもののなのです。ですから、昨日の私と今日の私は細胞レベルでは違った生物であり、1年前の私と今日の私は、まったくの別人と考えることができます。

生命は作り上げることより、破壊することにより生命力を維持しています。しかも大きく変化しないよう、常に小さな破壊により平衡状態を保っています。機械論的生命観は時間を視野に入れていませんが、動的平衡論は常に時間を視野に入れますので、外部からの変化や圧力に対し、平衡を保とうとする作用が働きます。

講演の最後に、福岡氏の趣味であるフェルメールの絵画についての話がありました。ニューヨークで初めてフェルメールの絵画に出会い、その“光の魅惑”に魅了された福岡氏は、フェルメールの全作品37点(1点は盗難に遭い行方不明)の原画が飾られている美術館に行き、すべてを見てきたそうです。そして、その旅の紀行を「フェルメール 光の王国」にまとめ、出版しました。さらに、色が劣化した原画のデジタル版を入手し、最新のデジタル印刷技術によってリ・クリエイトしたフェルメールの絵画全37点を展示する「フェルメール・センター銀座」の設立に大きくかかわりました。



青山学院大学 総合文化政策学部
教授 福岡伸一氏

第二部 懇談会

懇談会では、製薬協の中山譲治新会長が、製薬協を設立する必要性に迫られた50年前の業界事情や、50年間に飛躍的に発展した国内製薬企業の新薬開発能力について、また、今後期待される生命科学の進歩を正確に評価する環境作りについて挨拶をしました。

続いて、厚生労働省を代表して厚生労働大臣の加藤勝信氏が日本発の革新的新薬や医薬品産業強化総合戦略について、日本医師会を代表して副会長の中川俊男氏が超高齢社会におけるかかりつけ医のための適正処方の手引きや医薬品医療機器等法改正について、日本薬剤師会を代表して副会長の森昌平氏が抜本的薬価改定や世界に通用する日本発の創薬について、日本医薬品卸売業連合会を代表して副会長の吉村恭彰氏が流通改善ガイドライン等について、それぞれ来賓挨拶がありました。



製薬協 中山 譲治 会長



厚生労働大臣 加藤 勝信 氏



日本医師会 副会長 中川 俊男 氏



日本薬剤師会 副会長 森 昌平 氏



日本医薬品卸売業連合会 副会長
吉村 恭彰 氏

日本製薬団体連合会会長の手代木功氏の乾杯の発声で開宴となり、会場内では至る所で懇談の輪が広がりました。中締めにあたっての製薬協内藤晴夫副会長の挨拶の後も歓談は続き、大盛況のうちに製薬協50周年記念講演会は無事終了することができました。



日本製薬団体連合会 会長
手代木 功 氏



製薬協 内藤 晴夫 副会長



懇談会の様子

(事務局長 住田 高志)